

# 大分県現代俳句協会句会報 第25号

令和6年8月15日発行

## 【自薦作品結果&第一回雑詠句会選句号】

### 自薦作品 結果発表（選句&選評）

26点 秋灯をガザの祈りが埋めてゆく 足立 攝

15点 母泣かすはずじゃなかった枇杷の花 足立 町子

15点 村痩せて落葉が騒ぐ通学路 上田たかし

14点 鰯焼く戦火に引火せぬように 吉田 素子

13点 トマト挽ぐ赤信号の色だけど 河野 輝暉

13点 祭果てみんな出てゆく無人駅 有村 王志

12点 針穴を覗けば郷の春祭り 菅 攝子

12点 先生はいつも普段着夜学の灯 牧野 桂一

11点 迎え茄子を下手と亡き子に褒めらるる 河野 輝暉

11点 綿菓子のような告白冬に入る 鎌倉真由美

10点 一歩ずつ晩年の貌落葉踏む 有村 王志

10点 秋の季語あふれつまづく赤い靴 甲斐加代子

《9点句》

痩せた手で九月の痩せた蚊を叩く

神 慶子

燃えるものみな美しき神楽月

足立 攝

空蟬や未来へ向う置き手紙

本田 圭子

日だまりを出でて帰らぬ冬の蝶

時松由美子

《8点句》

憂きことのない顔をしてレモンティ

立花真由美

蚯蚓鳴くたまにはお血洗ってよ

桐野 力

こだわりの湯呑み一服秋を飲む

永松左世美

山の端に帰りそこねし白い満月

赤峰佐代子

《7点句》

内視鏡するりと師走まで伸びる

足立 攝

LINE打つ指に冬日を少し足す

足立 攝

村にまだやさしさ残る木守柿

下司 正昭

収穫の大根など煮て足る暮らし

立花真由美

今だから言える身の上式部の実

足立 町子

大夕焼明日に予定のない安堵

高橋 玲子

おみなえし私を知らぬ母がいる

石橋紀公子

みどり児を抱く眼差し合歡の花

志賀 文子

飢えもなく争もなく昼寝かな

福井トミ子

ひとすくい太古の味や寒の水

大村 和代

《6点句》

穂芒やみんな素直なフリをする

陣野千恵子

てのひらは無言無想の寒露かな

有村 王志

抜け殻になつて落葉の中にいる  
 父とゆく十一月の遠い海  
 墨の香の筆にのこれる秋思かな  
 歳月の重み分け合う大銀杏  
 紅葉に吞まれ平和の水を飲む  
 稲埃吸つて農婦の腰豊か  
 立冬の村は能面老いてゆく

せめぎ合う棋士の手のうち野火走る  
 壮年も晩年も過ぎ返り花  
 ちよつぱり泣きちよつぱり笑う秋の空  
 サラリーマン終えいし背広の土用干し  
 生身魂涼しく舐めて紙を切る  
 ロシアへとディランよ響け風は秋  
 短日の風をたたんで廃校舎

田中 充  
 河野 洋子  
 内田トシ子  
 河野 則子  
 藤 万 葉  
 藤 万 葉  
 上田たかし

十三夜独りに慣れぬ友と居る  
 賞められて疎まれて蜘蛛の囀ゆらり  
 侘助の高きを眺め背を伸ばす  
 天高し直線の雲東京行き  
 銀杏を散らして母校は日曜日  
 帰省子の今朝まで居りし六畳間  
 戦争がぬつと顔出す紅葉山

林 香澄  
 林 香澄  
 幸谷 恵子  
 時松ヤスコ  
 赤峰佐代子  
 佐藤 律子  
 白土 正江

## 自薦作品集(点盛)

自薦作品には73名の会員から290句が集まりました。作品番号の下の○印の中が採られた数(点盛)です。今号には第1回雑詠句会の選句用作品集と、第2回雑詠句会の募集要項が掲載されています。

新茶汲む君の齢や透きとおる  
 銀河の尾さらきら絵本飛び出して  
 われを噛む瘦せ蟻のありありがとう  
 喪の家のむすびの乾き菊繪  
 足洗ふ疎水に夏のまだ名残り  
 限界村落殺意の走る薄氷田  
 墨の香のゆるりと立ちて文化の日  
 来し方は誰にも言わず桐一葉  
 短日のお好み焼に足す涙  
 団栗を踏む子拾う子おどける子  
 風になり少年渡る秋彼岸  
 青柿のしずかに太る夜の呼吸  
 抽斗を半分開けて秋落暉  
 凌霄花スカートほどの揺らぎかな  
 春の夢未完のままに村に老ゆ  
 喜びも悔いも日なたの氷かな  
 はじめて語るじいじの戦争文化の日

菅 攝子  
 牧野 桂一  
 河野 輝暉  
 福田 英子  
 吾 亦 紅  
 有村 王志  
 本田 圭子  
 早澤まり子  
 足立 町子  
 生野 義晴  
 有永真理子  
 高橋 玲子  
 河野 則子  
 高倉 直人  
 御手洗豊海  
 佐藤 律子  
 白土 正江

宮川三保子  
 河野 輝暉  
 吾 亦 紅  
 井上 則子

1 さつまいもほくほくしての焼き芋かな 小川 良子  
 2 赤と白庭一面の曼珠沙華 小川 良子  
 3 鬼灯を唇でかむ母がいる 小川 良子  
 4 ②冬眠を前にせかせる土起し 岡野 絃宣  
 5 ③パン食うて青刈り稲は牛の餌 岡野 絃宣  
 6 ③家族葬菊の陰よりややの声 岡野 絃宣  
 7 ③船外機パンパンと冬叩く 岡野 絃宣  
 8 ②混沌の戦禍未だに冬の海 安田 文  
 9 ①積雲のふわりふわりと天高し 安田 文  
 10 物原にしげる露草輝かし 安田 文  
 11 ③田舎には田舎の妙味ささげ飯 安田 文  
 12 ③分葱茹で朝の青さを確かめる 菅 攝子  
 13 ②針穴を覗けば郷の春祭り 菅 攝子  
 14 ⑤新茶汲む君の齢や透きとおる 菅 攝子  
 15 ③小豆干す故郷の空の見えるまで 菅 攝子  
 16 ①玉椿祖母の素顔を懐かしむ 菅 登貴子  
 17 ①若水や喉とおす日の静かなり 菅 登貴子  
 18 ①母の摘む春菊の香や優しき香 菅 登貴子  
 19 ②カリフラワー初めて会話する厨 菅 登貴子

20 ⑤銀河の尾さらきら絵本飛び出して 牧野 桂一  
 21 ⑫先生はいつも普段着夜学の灯 牧野 桂一  
 22 ①障子の灯踊れる五指のシルエツト 牧野 桂一  
 23 桃を剥くバトン少女のバトン立て 牧野 桂一  
 24 ②散りぢりの友にヤッホー罌雲 神 慶子  
 25 ⑨瘦せた手で九月の瘦せた蚊を叩く 神 慶子  
 26 冷たくてすました月に投げるキス 神 慶子  
 27 ③葬よりの帰宅の夫に梨を剥く 神 慶子  
 28 この道を行くと決めた白吾亦紅 宮川三保子  
 29 ③血筋の消えたふる里白い秋 宮川三保子  
 30 ②一粒の種の重さや稲穂垂る 宮川三保子  
 31 ④耐える事にすこし疲れびわの花 宮川三保子  
 32 ⑥秋灯をガザの祈りが埋めてゆく 足立 攝  
 33 ⑨燃えるものみな美しき神楽月 足立 攝  
 34 ⑦内視鏡するりと師走まで伸びる 足立 攝  
 35 ⑦LINE打つ指に冬日を少し足す 足立 攝  
 36 かたつむりなぜか電線渡りおり 山口 雀昭  
 37 ③海に見る磯の香りの天の川 山口 雀昭  
 38 デデポツポと野鳩なきしか鳩吹か 山口 雀昭

### 《4点句》

耐える事にすこし疲れびわの花  
 棒短くさようなら空へ胡瓜の蔓  
 望郷の思いに募る草紅葉  
 かさと落ちこそと踏まれて柿落葉

宮川三保子  
 河野 輝暉  
 吾 亦 紅  
 井上 則子

- 39 ①紙漉きて今日も暮れ行く村の里 山口 雀昭  
40 ③息白し星空仰ぐ午前四時 大神 愛子  
41 骨折の痛みも忘れ木枯らしや 大神 愛子  
42 ①五年ふり再開の弟白髪増え 大神 愛子  
43 虹かかる逝きし母の年越した今 大神 愛子  
44 ②ゆらゆらと二日月の舟西へ向く 平田千代子  
45 ①遠い日の吾が一世なり秋深し 平田千代子  
46 コスモスは群れ咲きてこそ美しき 平田千代子  
47 タぐれてときれときれの虫の音 平田千代子  
48 ①霧となる焼跡闇市戦中派 下司 正昭  
49 ①略農の集落絶えて花芒 下司 正昭  
50 ⑦村にまだやさしさ残る木守柿 下司 正昭  
51 ③レノンの言デビロードはとしえに 下司 正昭  
52 ④棒短くさようなら空へ胡瓜の蔓 河野 輝暉  
53 ⑤われを囓む瘦せ蟻のありがとう 河野 輝暉  
54 ⑪迎え加子を下手としき子に寝めらる 河野 輝暉  
55 ⑬トマト挽ぐ赤信号の色だけど 河野 輝暉  
56 ③散りてこそ想いの丈を萩の花 陣野千恵子  
57 ⑥穂芒やみんな素直なフリをする 陣野千恵子  
58 ②稻刈りを終えたる母の柔かき 陣野千恵子  
59 立秋がきても素直になれません 陣野千恵子  
60 ⑤喪の家のむすびの乾き菊脛 福田 英子  
61 子午線に祭弔ひ露の世に 福田 英子  
62 ①つくづくと子規の享年衣被 福田 英子  
63 ③山頭火の笠は隣に野紺菊 福田 英子  
64 邪魔ものの泡立草が風を呼ぶ 吾 亦 紅  
65 深秋や冷めたコーヒー夜のしじま 吾 亦 紅  
66 ④望郷の思いに募る草紅葉 吾 亦 紅  
67 ⑤足洗ふ疎水に夏のまだ名残り 吾 亦 紅  
68 ①還れないプラスチックの桜かな 岸本千鶴子  
69 ③夏帽のかくす敗者の涙かな 岸本千鶴子  
70 まろびつつ歩く七十路石路の花 岸本千鶴子  
71 ①バラックの無人販売秋深む 岸本千鶴子  
72 ⑦収穫の大根など煮て足る暮らし 立花真由美  
73 語るかに葬送の辞や身にぞ入む 立花真由美  
74 ⑧憂きことのない顔をしてレモンテイ 立花真由美  
75 ①吾もしくじり数えてみたり桜桃忌 立花真由美  
76 ⑤限界村落殺意の走る薄氷田 有村 王志  
77 ⑬祭果てみんな出てゆく無人駅 有村 王志  
78 ⑩一歩ずつ晩年の貌落葉踏む 有村 王志  
79 ⑥てのひらは無言無想の寒露かな 有村 王志  
80 ⑧蚯蚓鳴くたまにはお皿洗ってよ 桐野 力  
81 ①釣瓶落とし名山ひとつ影絵めき 桐野 力  
82 平凡な夜平凡な朝バツタ飛ぶ 桐野 力  
83 ③だあれにも言えぬ夢蛇穴に入る 桐野 力  
84 ②口々に褒める柿あり納棺日 岡村 君香  
85 ①ペランダに布団の花咲く秋日和 岡村 君香  
86 ②短日や終業ベルに嫉妬する 岡村 君香  
87 ①振り向けばそこには落ち葉ケセラセラ 岡村 君香  
88 ②羽衣のごとき雲あり秋高し 佐藤 次江  
89 ②冬瓜のポトフとろける心まで 佐藤 次江  
90 ①ふんわりとユキア秋色庭の隅 佐藤 次江  
91 ③冬日和パッチワークの針すすむ 佐藤 次江  
92 ③夕月に澱んだ心見抜かれる 赤嶺 広史  
93 ①秋深し二串の団子分けて置く 赤嶺 広史  
94 ③落葉掃くほどよき距離の隣保班 赤嶺 広史  
95 ①けんけんばしてもみじ葉の端をゆく 赤嶺 広史  
96 ⑨空蟬や未来へ向う置き手紙 本田 圭子  
97 秋茄子や刃物研ぎ屋のおいさん 本田 圭子  
98 ⑥抜け殻になつて落葉の中にいる 本田 圭子  
99 ⑤墨の香のゆるりと立ちて文化の日本 本田 圭子  
100 ②明日あると信じて老いの温め酒 早澤まり子  
101 ⑤来し方は誰にも言わず桐一葉 早澤まり子  
102 ③孫なしの人生もあり小豆煮る 早澤まり子  
103 ③さつそうと八十路を生きて寒牡丹 早澤まり子  
104 ①南向きの窓を横切る十三夜 井上 則子  
105 踏み出そう季は秋最中友の声 井上 則子  
106 ②蔦紅葉櫛の幹に彩添えて 井上 則子  
107 ④かさと落ちこそと踏まれて柿落葉 井上 則子  
108 ⑮母泣かすはずじやなかつた枇杷の花 足立 町子  
109 ⑥父とゆく十一月の遠い海 足立 町子  
110 ⑦今だから言える身の上式部の実 足立 町子  
111 ⑤短日のお好み焼に足す涙 足立 町子  
112 ④せめぎ合う棋士の手のうち野火走る 田中 充  
113 ①螢火の思いの丈を綴りたる 田中 充  
114 ①母系絶え父系も遠し秋の暮 田中 充  
115 ③隙間風浮世の塵がうづくまる 田中 充  
116 ①秋風に吹かれて散歩我一人 清家 元幸  
117 ザワザワと木の葉擦れ合う秋の森 清家 元幸  
118 寒き朝季節が変わる秋の日に 清家 元幸  
119 黄蝶が進む山なり秋の日に 清家 元幸  
120 ③新米の香りただよふ朝のドア 天田 泉美  
121 ①秋さぶや心の棘を解き放ち 天田 泉美  
122 ひとり居を目ざめ秋冷深みをり 天田 泉美  
123 ①テールランプを見送る指の夜寒 天田 泉美  
124 ④壮年も晩年も過ぎ返り花 河野 洋子  
125 ②寒卵今朝生みたてと一個づつ 河野 洋子  
126 食べ頃よ熟柿がサイン送つてる 河野 洋子  
127 変化球キャッチ夫への返り花 河野 洋子  
128 ①秋麗やキャンセル待ちのバス旅行 田代 直之  
129 ②彼岸花崩れしままの文化財 田代 直之  
130 ①天国の柩の中の花野かな 田代 直之  
131 晩年の行く末重ね烏瓜 田代 直之  
132 ドンドンと神楽軍団大暴れ 原田 勝子  
133 溪流の山女魚づくしに人ルンルン 原田 勝子  
134 ①馬貞墓地守る軍勢水引草 原田 勝子

165164163162161160159158157156155154153152151150149148147146145144143142141140139138137136 135

② 良夜なる飲めぬ夫おとこに妻ロック 原田 勝子  
 ① 霧の中すぐこのという遠さかな 川西 達子  
 ① 明日あるを信じ花の種を採る 川西 達子  
 朝まだき月の蝕にしばし佇む 川西 達子  
 ① 秋深し能面般若の怪しき舞 川西 達子  
 ライダーが押し寄せる阿蘇の芒原 生野 義晴  
 ① 秋声に身じろぎもせぬ忠魂碑 生野 義晴  
 出没の熊におののく秋の街 生野 義晴  
 ⑤ 団栗を踏む子拾う子おどける子 生野 義晴  
 ⑤ 風になり少年渡る秋彼岸 有永真理子  
 雲ゆたり残暑は去ると告げてゆく 有永真理子  
 ③ 過ぎてゆく時間の中を茄子の花 有永真理子  
 ③ 村は今案山子主役となりけり 有永真理子  
 ① 秋麗や健気な赤子抱きおり 永松左世美  
 ① 朝の日をひとりじめする木守柿 永松左世美  
 ⑧ こだわりの湯呑み一服秋を飲む 永松左世美  
 ② 苛立ちは消えてしまえよ虚栗 佐々木 玉  
 ① 残り蚊を払い仏陀に合掌す 佐々木 玉  
 旅慣れた人に寄り添い地虫鳴く 佐々木 玉  
 ① 蛇口より漏れる水音秋深し 佐々木 玉  
 木守り柿願い込めるも鴉来る 佐藤 哲夫  
 ② 選挙戦案山子と握手出発す 佐藤 哲夫  
 中腰の横一列や生姜掘り 佐藤 哲夫  
 市役所の憩いの俳句暮の秋 佐藤 哲夫  
 ⑤ 青柿のしずかに太る夜の呼気 高橋 玲子  
 老木の表皮めくれて秋思かな 高橋 玲子  
 ⑦ 大夕焼明日に予定のない安堵 高橋 玲子  
 一つの世も恋は異なもの紅葉忌 高橋 玲子  
 ④ ちよつぱり泣きちよつぱり笑う秋の空 内田トシ子  
 ③ 独り居の和みの日々や萩溢る 内田トシ子

197196195194193192191190189188187186185184183182181180179178177176175174173172171170169168167166

姦人本音飛び出す曼珠沙華 内田トシ子  
 焰立つ山の形に紅葉かな 内田トシ子  
 なにげなく見上げる空は冬の色 安部ユリ子  
 ① 刈干しの唄につられて県境 安部ユリ子  
 お気に入りシーズンOFFの十用干し 安部ユリ子  
 ① 芋の葉の露に飲まれて虫まるく 安部ユリ子  
 ⑤ 抽斗を半分開けて秋落暉 河野 則子  
 晴れや卦と唱えつ土用の背広干す 河野 則子  
 ⑥ 墨の香の筆にのこれる秋思かな 河野 則子  
 ④ サフリーマン終えし背広の十用干し 河野 則子  
 ① 山茶花を見てみえてなし出勤す 安森 範明  
 ① 新米を受けて恩師の笑顔かな 安森 範明  
 ② 笛の音や雅楽の調べ冬椿 安森 範明  
 ① 土手歩く足元かすめ夏つばめ 安森 範明  
 ④ 生身魂涼しく舐めて紙を切る 藤 万 葉  
 ① にわか雨案山子の傘を借りて待つ 藤 万 葉  
 ④ ロシアへとテイランよ響け風は秋 藤 万 葉  
 良夜よシヨパン聴くと「七力」の句 藤 万 葉  
 まどわされて金木屋の中に居る 小野みち子  
 自分から銀木屋の中入る 小野みち子  
 ② おしろい花とうに忘れた化粧かな 小野みち子  
 ② 芒原なつかしき人通り行き 小野みち子  
 ⑩ 秋の季語あふれつまづく赤い靴 甲斐加代子  
 ② うたせ湯にもみじかつ散る句会かな 甲斐加代子  
 ⑥ 歳月の重み分け合う大银杏 甲斐加代子  
 ⑥ 紅葉に吞まれ平和の水を飲む 甲斐加代子  
 ⑥ 稲埃吸って農婦の腰豊か 鎌倉真由美  
 ② 長き夜や眼の裏の五七五 鎌倉真由美  
 ③ 口髭にカフエオレの泡冬うらら 鎌倉真由美  
 ⑪ 綿菓子のような告白冬に入る 鎌倉真由美  
 ⑤ 凌霄花スカートほどの揺らぎかな 高倉 直人  
 ③ 新涼や海に引き継ぐ滑走路 高倉 直人

229228227226225224223222221220219218217216215214213212211210209208207206205204203202201200199198

① 秋深しページをめくる音清し 高倉 直人  
 ② クレヨンを並べて富良野秋の蝶 高倉 直人  
 山笑い山燃え命連鎖する 坂本 一光  
 ① 山笑い山燃えやがて就く眠り 坂本 一光  
 ① 一張羅で命をつなぐ草紅葉 坂本 一光  
 ① 生きている生きているよと虫の闇 坂本 一光  
 ⑫ 村瘦せて落葉が騒ぐ通学路 上田たかし  
 ⑥ 立冬の村は能面老いてゆく 上田たかし  
 ④ 短日の風をたたんで廃校舎 上田たかし  
 ③ 山茶花のこぼる校庭献血車 上田たかし  
 ① 笑点の渦の中だけ点る日々 加藤 征孝  
 夏物と冬物着替娘継ぐ 加藤 征孝  
 トラクターの稲の歩幅に風過ぎる 加藤 征孝  
 ① 乞食たち風が羨む夜の飯 加藤 征孝  
 ② 秋夜明金星に肺掴まれる 林 香澄  
 ② 鬱屈はひらがなにして秋の風 林 香澄  
 ④ 十三夜独りに慣れぬ友と居る 林 香澄  
 ④ 賞められて疎まれて蜘蛛の囀り 林 香澄  
 ① 肩書は無用枯野に夢を追う 御手洗豊海  
 ② 孤独でも我は我道枯野ゆく 御手洗豊海  
 ⑤ 春の夢未完のままに村に老ゆ 御手洗豊海  
 ② 生きているお山の大將冬銀河 御手洗豊海  
 ⑨ 日だまりを出でて帰らぬ冬の蝶 時松由美子  
 ② 山茶花や一人ごころの空と風 時松由美子  
 ① 首かしげ枯蟻のわれを見る 時松由美子  
 ③ 横顔のしあはせそうな日向ぼこ 時松由美子  
 ③ まびき菜を泳がせすくう手のざるで 竹下美津子  
 ① 冬野菜発芽の隊列勇ましく 竹下美津子  
 ① 義母の折る紙の蝶飛ぶ白き壁 竹下美津子  
 「歩こう云」午後のリュックに秋麗 竹下美津子  
 ③ はにかんだ順に鬼灯朱くなる 吉田 素子  
 ⑭ 鯛焼く戦火に引火せぬように 吉田 素子

261260259258257256255254253252251250249248247246245244243242241240239238237236235234233232231230

- ② 今生れし子を触るかに掌の熟柿 吉田 素子
- ③ 突風にからかわれつつ落葉掃く吉田 素子
- ① 網投ちの腕より鮎の早さかな 菅 勲
- きざはしを登れずヒンズー神の秋菅 勲
- ① 鶏頭や戦の神の裏おもて 菅 勲
- ① 陶郷の棚田を秋が降りて来る 石橋紀公子
- ② 蔓引けばむかごほろほろ野津の郷 石橋紀公子
- ⑦ おみなえし私を知らぬ母がいる 石橋紀公子
- ① かるめ焼つんと崩れる秋うらら 石橋紀公子
- ① 晩秋の午後教会の硬い椅子 赤峯 友子
- ③ 船虫が奈落の国へさらわれる 赤峯 友子
- ① 落ちておちて私がどんぐりになる 赤峯 友子
- ① 丘陵は海につながる寒夕焼 赤峯 友子
- ① 秋高し地這い登りし無明橋 國廣 精膳
- ② 脳腫瘍農に生きたや花芒 國廣 精膳
- 倒れてなほ駆け出すかな寒の水 國廣 精膳
- ② タデ原や芒の穂波孫走る 國廣 精膳
- ③ まつづくに生きて土夏布なる久女の忌 幸谷 恵子
- 空也忌や俵の軽きコシヒカリ 幸谷 恵子
- ④ 侘助の高きを眺め背を伸ばす 幸谷 恵子
- ① 冬の蚊や海よりの風温し 幸谷 恵子
- ② 寒雷や住処追われる小鳥たち 加納 知子
- 白蛇に金運頂く紅葉山 加納 知子
- 霰降り弾あられ降り人の世は 加納 知子
- ② 婆ひとりポンコツ駆って花野まで 加納 知子
- 玉の汗幾つも越えて上り坂 志賀 文子
- 月参り坂を登れば風青し 志賀 文子
- ⑦ みどり児を抱く眼差し合歡の花 志賀 文子
- 我が生家終焉なりし秋の暮れ 志賀 文子
- ① 稲穂垂れ出番だ出番コンバイン 時松ヤスコ
- ④ 天高し直線の雲東京行き 時松ヤスコ
- 曼珠沙華紅風吹いて七ツ森 時松ヤスコ

- 水分けて水分峠の霧が泣く 時松ヤスコ
- ⑦ 飢えもなく争もなく昼寝かな 福井トミ子
- 田を守り村を護りて風薫る 福井トミ子
- ① 老人ホーム週一回のパン屋さん 福井トミ子
- 満月や夜の目遠目笠の内 福井トミ子
- ⑧ 山の端に帰りそこねし白い満月 赤峰佐代子
- ④ 銀杏を散らして母校は日曜日 赤峰佐代子
- 血圧は今日も正常蕪間引く 赤峰佐代子
- ④ 銀杏を散らして母校は日曜日 赤峰佐代子
- 健脚に径譲りつつ紅葉山 赤峰佐代子
- ④ 帰省子の今朝まで居りし六畳間 佐藤 律子
- 冬めくや家系図たどる吾の記憶 佐藤 律子
- ⑤ 喜びも悔いも日なたの氷かな 佐藤 律子
- 朝霧や季のもの多しお品がき 佐藤 律子
- ① 洗面台の二匹の蟻プロローグ 松廣 李子
- ① 番号で呼ばれる秋の診療所 松廣 李子

- ① 鳩は舞い秋空へ駆。ピアノ 松廣 李子
- ③ 箱型の家の凹みや翹雲 松廣 李子
- ⑦ ひとすくい太古の味や寒の水 大村 和代
- 枯れ草の命を散らし種守り 大村 和代
- ① 風吹けどゆれや無心の枯れ尾花 大村 和代
- ③ バラ一輪ささぐ心は百万本 大村 和代
- ① 見渡せば村は稲刈る日和かな 大森 浩司
- 秋日和りハビリテーション百歩行く 大森 浩司
- 山寺に着けば静かな紅葉かな 大森 浩司
- ③ みかん剥く香りの扉開くごと 大森 浩司
- ⑤ はじめて語るじいじの戦争文化の日 白土 正江
- ④ 戦争がぬつと顔出す紅葉山 白土 正江
- ① 視界ゼロ鉄橋の霧日本の霧 白土 正江
- ① 思い出はみな結晶に枯蝟螂 白土 正江

自薦作品・選 & 選評 ◆ 到着順 ◆

自薦作品290句を76名の選者で選句しました。今回の会員外のゲスト選者は田原夏子さん(田原千暉夫人)、丘友子さん(同長女)、佐瀬隆義さん(元「石」同人)、夢野はる香さん(天籟通信)、山本悦子さん(同編集長)の五名です。ありがとうございました。

山口 雀昭 選  
 ≪32, 55, 100, 124, 129, 143, 180, 218, 229, 263≫  
 263 飢えもなく争もなく昼寝かな (福井トミ子)  
 といった事もなく平々凡々と昼寝していられる日本の姿を詠まれた事は素晴らしい事と感激しました。

現在の日本はこれぞといった飢えた社会や争いもない平凡な生活をしておりますが、世界に目を向けますと『ロシア、ウクライナ、北朝鮮、中国』などといった国が地球を乱しております。そんな中、食べる物に不自由もなく、これぞ息が真っ白になる程冷えた午前四時の様子が

小川 良子 選  
 ≪24, 31, 40, 77, 108, 120, 148, 177, 263, 278≫  
 40 息白し星空仰ぐ午前四時 (大神 愛子)

よく解りました。

菅 攝子 選

《19, 50, 52, 53, 54, 77, 172, 206, 237, 286》  
50 村にまだやさしさ残る木守柿

(下司 正昭)

ふるさとは、今も坂を登れば柿の木が甘く  
優しく迎えてくれる。心境をまさに伝えて、ど  
こか懐かしい。思い出は柿の木に実っている。

岡野 紘宣 選

《67, 80, 91, 112, 162, 197, 215, 230, 235, 286》

宮川三保子

《6, 13, 32, 54, 78, 110, 130, 172, 204, 277》  
54 迎え茄子を下手と亡き子に褒めらるる

(河野 輝暉)

亡くなられた息子さんが帰ってくるお盆です。  
新たな悲しみがわいてきます。帰ってくる息子  
さんのために茄子や胡瓜で馬や牛を作ります。  
割ばしで脚を作りますが中々上手にいきません。  
それでも 天国から「お父さん良くできたよ」  
とほめてくれます。親子の情愛に切なく心に残  
る作品でした。

足立 攝 選

《12, 27, 60, 108, 146, 160, 188, 197, 269, 276》

269 銀杏を散らして母校は日曜日

(赤峰佐代子)

本当に日曜日だったらどんなにいいだろう。  
しかし本当に日曜日だったらこの情感は生まれ

てこない。なぜ廃校だと判断できるのか、その  
ニュアンスを表現できるのが俳句であり作家の  
腕である。

たとえば中七。凡庸な指導者なら「散らして  
母校は」の八音を「散らし母校は」「散らして  
母校」のように七音へ書き変えるだろう。「母  
校は」の格助詞「は」は散文的になるから、な  
どとんでもなく見当違いの指導をするかも知  
れない。そうすれば毒にも薬にもならない作品  
ができあがり、晴れて日曜日の一コマとなるの  
である。

母校は、かけがないの自分の分身である。  
この学校が廃校になるなどは、実際に廃校が  
近くなるまで考えたこともなかったはずだ。今、  
眼前に、在りし日そのままの母校がある。

菅 登貴子 選

《12, 13, 14, 53, 54, 56, 79, 175, 205, 271》

牧野 桂一 選

《34, 54, 96, 111, 162, 180, 195, 205, 239, 287》  
287 はじめて語るじいじの戦争文化の日

(白土 正江)

「はじめて語るじいじの戦争」が「文化」に  
なった「日」。これこそが本当の「文化の日」。  
そして、それは、そのまま「はじめて語るじい  
じの戦争」が俳句になった日でもある。私たち  
は、「戦争を忘れてはならない」とただ叫ぶこ  
とから、その言葉を俳句にして「文化」として、  
伝えていかなければならない。この句はそのこ  
とを、的確に私たちに伝えてくれている。短い  
こと、分かり易いこと、尊いことが、俳句の原

点にある。

赤嶺 広史 選

《33, 57, 86, 98, 111, 157, 195, 206, 218, 228》

下司 正昭 選

《32, 55, 69, 77, 176, 182, 205, 208, 218, 289》  
289 視界ゼロ鉄橋の霧日本の霧

(白土 正江)

松本清張の著書に日本の黒い霧という作品が  
ある。戦後の混乱した時代に起きた数々の事件  
を清張独自の視点で推理した「帝銀事件」や  
「下山総裁事件」等である。正江さんはこれら  
黒い事件を念頭において日本の霧と詠んだのだ  
ろうか。それとも、現代の黒い霧「政治資金パ  
ティー」の事を詠んだのだろうか。いずれにし  
ても私はこの句は社会性俳句と判断した。それ  
にしても政治の世界は、今も昔もうす汚い。

清家 元幸 選

《33, 40, 45, 56, 63, 66, 77, 93, 102, 189》

早澤まり子 選

《21, 24, 35, 49, 55, 78, 99, 129, 190, 279》  
190 歳月の重み分け合う大銀杏

(甲斐加代子)

見上げる程の大銀杏もいろいろな面で役に立っ  
てくれていると思います。太陽の強い日差しを  
さえぎって、木陰を作ってくれたり、秋には美  
しい色で人々をなごませてくれます。命ある物、  
何か一つは秀でた面があるものなんです。

作者と大銀杏、一緒に生きて来た感が伝わり

ます。この大銀杏はなんだか頼もしさも感じます。何でも受け止めてくれそうですね。

河野 則子 選

《4, 11, 13, 53, 96, 171, 224, 230, 244, 279》  
96 空蟬や未来へ向う置き手紙

(本田 圭子)

「空蟬」を「置き手紙」と結んだことで、未来への希望を暗示している。こうした前向きの句に出逢うと、私自身元気をもらおう、空蟬はともするとマイナスのイメージがある。だが内容次第ではどんな言葉で締めるかで、余韻のある句に仕上がる。本句のように、自由に広い想像への誘いは俳句のすぐれた力の一つだと思う。

有村 王志 選

《13, 21, 31, 33, 52, 110, 205, 216, 229, 288》  
21 先生はいつも普段着夜学の灯

(牧野 桂一)

県内にある夜間学校をモチーフにした作品。素朴なりアリティに心惹かれる。先生の着ている普段着姿がやはり、この作品の落としどころで納得できる。

大神 愛子 選

《18, 29, 67, 79, 109, 125, 179, 205, 271, 283》  
125 寒卯今朝生みたてと一個づつ

(河野 洋子)

生活感が出ていて、生みたての卵一個づつ何人家族かな？と想像しながら読みました。昔、我が家にもわとりを飼っていて、弟と私はエサやりをしていました。冬は産卵も少なく貴重な

栄養源の産み立て卵をご飯にかけて食べました。父母がよく云っていた言葉は「寒卯は栄養価が高い」と云っていたなつかしさを思い出させてくれたこの句が大好きでした。

内田トシ子 選

《55, 66, 74, 80, 88, 143, 188, 196, 215, 257》

河野 輝暉 選

《34, 58, 86, 102, 162, 229, 234, 237, 244, 265》  
229 翫焼く戦火に引火せぬように

(吉田 素子)

何という絶世の佳什だろう。佐藤春夫の「秋刀魚の歌」の寂寥の名詩を想起したと思っていると、ウクライナやパレスチナの地球的残忍極まりない殺し合いが混然と暗示される。それも軽妙で平明でユーモアさえ漂わせているところが心憎い。イスラエルやパレスチナの紛争は紀元前七世紀のゾロアスター教に端を発する一神教間の内輪もめで度し難い宗教戦争。未来永劫に終結はないだろう。

この一句の中には、少なくとも選評の分量が凝縮されていることを考えると、作者の詩韻生動あふれる情趣に敬服する。

桐野 力 選

《34, 55, 77, 164, 196, 219, 220, 249, 260, 269》  
34 内視鏡するりと師走まで伸びる

(足立 攝)

何故が気が楽になりそうな一句。健診で再検査の通知。行こうと思いつつも多忙さで師走まで過ぎたのでしょうか？

中七の「するりと師走まで」にのフレーズに心配事もどこかに。

原田 勝子 選

《35, 55, 106, 124, 151, 175, 249, 257, 269, 282》

吾亦 紅 選

《14, 32, 54, 57, 74, 77, 109, 143, 195, 206》  
109 父とゆく十一月の遠い海

(足立 町子)

あまりにも十一月の海は遠い。

安田 文 選

《33, 51, 107, 112, 152, 162, 164, 211, 237, 247》

藤 万 葉 選

《20, 32, 55, 67, 79, 96, 195, 207, 236, 238》  
195 綿菓子のような告白冬に入る

(鎌倉真由美)

綿菓子のような告白とは、どんな感じなのでしょう。淡い期待と甘いときめき。

恋のはじまりとイベント満載の白い冬がはじまる。さまざまな妄想に駆られる一句です。

天田 泉美 選

《12, 25, 32, 37, 74, 111, 144, 194, 204, 237》  
12 分葱茹で朝の青さを確かめる

(菅 攝子)

静かな明るい朝の台所が浮かんできます。自家菜園で採れた野菜が食卓を彩り、家族の会話や笑顔を誘う、いつもの日常が始まる一場面。さつと茹でた分葱のあの鮮やかさとしゅんとし

た透き通るような清々しい朝の空気とが、とても心地よく「朝の青さ」を感じさせてくれる一句でした。

立花眞由美 選

《20, 32, 55, 57, 108, 115, 188, 192, 204, 273》  
273 喜びも悔いも日なたの氷かな  
(佐藤 律子)

喜びは一瞬のものとして傍らに置いていますが、悔いは心の傷になっっている事が多く、自分で克服するしかありませんが苦しいものです。でも日々の暮らしに追われていつしか歳月も経つと次第に傷は癒えています。救われます。私も「日なたの氷」のごとく自然界に身を委ねて生きていきたいです。作者の芯の強さときりりとした生き様を想像させられた一句です。

安部ユリ子 選

《11, 37, 60, 85, 89, 146, 172, 189, 224, 279》

河野 洋子 選

《5, 21, 34, 55, 78, 107, 144, 229, 246, 273》

吉田 素子 選

《21, 50, 55, 66, 94, 108, 174, 194, 207, 288》  
174 墨の香の筆にのこれる秋思かな  
(河野 則子)

この句の作者は、今、大河ドラマで有名な紫式部、はたまた、和歌をしたためたあと、じつと月を仰いで涙しているかぐや姫、えもいわれぬ高貴な墨の香を聞きながら、ものおもいに耽っている十二単衣の作者を想像します。筆に残っ

た墨の香が句の材料になるなど全く気付かませんでした。この句に出会えた事が嬉しく、今から墨をする時は、この句を必ず思い出すことでしょうか。

井上 則子 選

《25, 32, 63, 72, 87, 92, 110, 151, 182, 191》  
72 収穫の大根など煮て足る暮らし  
(立花眞由美)

「さあ、俳句を詠もう。」と気負うことなく日々の暮らしの一コマを拾って詠む。目指すところであり、憧れです。

平田千代子 選

《14, 51, 72, 88, 106, 107, 125, 164, 192, 267》

有永真理子 選

《29, 32, 76, 102, 108, 136, 162, 188, 204, 228》  
29 血筋の消えたふる里白い秋  
(宮川三保子)

上・中句の「血族の消えたふる里」の表現に、作者の想いの深さが伝わってきます。さらに「血族」の赤と「白い秋」の白の色彩の対比がより一層印象深いものとなっています。

幸谷 恵子 選

《15, 32, 75, 83, 104, 109, 182, 191, 204, 288》  
75 吾もしくじり数えてみたり桜桃忌  
(立花眞由美)

しくじりの数を指で数えている作者が目につかぶ。しくじりの言葉には重大な間違いとかな品行という意味がある。この句のしくじりには

失敗という軽さや明るさを感じる。

桜桃忌は太宰治の忌日のこと、六月十九日に好物のサクランボを供えて供養する日となっている。本当の命日は玉川上水に入水した六月十三日であるが遺体発見の十九日を忌日としている。六月十九日が太宰の誕生日であることが、大好きであろう作者の句を明るく感じる。

川西 達子 選

《32, 56, 77, 113, 165, 188, 191, 195, 218, 240》  
191 紅葉に吞まれ平和の水を飲む  
四季のある美しい国に住む幸せ。そしてきれいな水の豊富な国に住む幸せ。(この頃少し気が変に感じるが)今外国のあちこちで終りの見えない戦争が続いている。わが国も弾こそ飛び交ってはいないが、近隣の国がミサイルを打ち上げるなどなんとなく危うい。紅葉の真中にいてきれいな水が飲める。

世界が日本が平和であることを祈る気持ちの表われている句と思ひ、いただきました。

神 慶子 選

《7, 21, 33, 76, 99, 108, 160, 192, 204, 229》

本田 圭子 選

《13, 25, 32, 33, 74, 146, 175, 186, 207, 218》

高橋 玲子 選

《35, 78, 111, 147, 204, 205, 229, 240, 260, 273》  
35 LINE打つ指に冬日を少し足す

上五の平凡な行為からの中七、下五の展開に読む側の想像が広がり句だと思ふ。寒い季節の折冬の太陽のあたたかさ、すなわち相手への

思いやりの一言を添える作者の優しさを感じ私人の推察をさせて頂いた。

心に映ったのではないだろうか。詩的な表現に感銘を受けました。

想像が膨らみます。季語の冬の蝶で寂しさが伝わってきます。

生野 義晴 選

《21, 32, 81, 98, 108, 112, 147, 162, 236, 240》  
162 大夕焼明日に予定のない安堵

(高橋 玲子)

うっとりする程の壮麗なる大夕焼を作者は時間の経過を忘れたかのようにジイーと見入っているのだろうか。幸いにも明日の予定にはこれといった用事もないし、こういう時は滅多になことだし心ゆくまま大夕焼の叙情に浸っても誰にも文句は言われないだろう。

あまりにも見事な大夕焼に日常の雑務から解放されて作者の心には安堵の思いにたつぷりと浸っている。作者の満足気な表情が目には浮かんでくる。

甲斐加代子 選

《79, 83, 96, 110, 151, 174, 196, 204, 220, 267》

石橋紀公子 選

《15, 32, 77, 103, 108, 110, 160, 214, 267, 288》  
267 山の端に帰りそこねし白い満月

(赤峰佐代子)

夜明けと共に輪郭を鮮明にしている山々とは対照的に、空には輝きを失った白い月が浮かんでいる。「帰りそこねし」と一見嘆きのような表記であるが、却って昨夜はこの満月を愛でたであろう作者の様子が伝わってくる。

朝を迎えたこの月は、澄んだ空気の中で、青空を背後にして白く美しく神秘的なものとして

田代 直之 選

《13, 35, 55, 78, 96, 144, 178, 195, 220, 228》  
55 トマト挽ぐ赤信号の色だけど

(河野 輝暉)

トマトから赤信号を発想させる作者のユーモア溢れる遊び心に俳句の奥行きを感じました。きつと「信号無視してごめんなさい」と一言声を掛けてトマトを挽いだのではないのでしょうか。作者の余裕すら伝わってきます。

時松由美子 選 40

《30, 34, 53, 80, 91, 165, 188, 254, 259, 267》  
80 蚯蚓鳴くたまにはお血洗ってよ

(桐野 力)

大変おもしろくもあるし大変印象深い句。私は蚯蚓が鳴く声を知らなくてめったに。たのまれそうな事を句にされたことをさすがと思いましたが。心に残る印象的な句でした。なんとすばらしい句と思いました。

時松ヤスコ 選

《9, 30, 79, 178, 188, 220, 254, 257, 263, 269》

高倉 直人 選

《32, 57, 74, 80, 99, 162, 188, 220, 247, 273》  
220 日だまりを出でて帰らぬ冬の蝶

(時松由美子)

ひだまりを出て帰らなかったのは近所のおしゃべり仲間か、仲の良い友達か、それとも家族か

森山 秀子 選

《14, 31, 32, 52, 78, 108, 144, 192, 247, 271》

安森 範明 選

《6, 42, 50, 52, 76, 120, 128, 174, 193, 278》  
278 箱型の家の凹みや罫雲

(松廣 李子)

現代の住居は、庭が無く、木も無く、箱型で車庫と、少しの空地が凹のような型になっている。私も木のない庭なんて、と思っていたが、最近年を重ねると、たしかに剪定、草取が出来なく、苦勞する。そこを、若い人は、もう考えているのか、少し悲しい。

赤峯 友子 選

《21, 32, 54, 76, 108, 144, 160, 204, 237, 287》  
32 秋灯をガザの祈りが埋めてゆく

(足立 攝)

ガザの人々の苦しみに思いを寄せている。祈るしかないという思い、祈りの深さを感じる。その思いが秋の夜を埋めてゆく。時事句は詩になりにくいのが、この句は「秋灯」という季語で詩になっている秀句だと思う。

足立 町子 選

《7, 15, 21, 55, 74, 80, 84, 213, 223, 287》  
213 鬱屈はひらがなにして秋の風

(林 香澄)

気が晴れないでふさぎ込む心情から抜け出す

には、「鬱屈」と言うがちがちな言葉をやさしいひらがなにしてみよう、という作者。何とすてきなアイディアであろうか。そして秋の風にふわりと乗せる、これではつちり。楽しくなりそう。

佐藤 哲夫 選

《25, 35, 72, 92, 151, 191, 204, 229, 267, 282》

岸本千鶴子 選

《20, 51, 63, 72, 79, 196, 219, 226, 229, 279》

永松左世美 選

《19, 25, 74, 124, 169, 191, 195, 204, 223, 257》

児玉 利子 選

《33, 54, 57, 78, 94, 108, 157, 195, 206, 231》

福田 英子 選

《7, 8, 25, 69, 74, 194, 197, 204, 229, 279》

佐藤 優美 選

《21, 35, 76, 90, 103, 108, 139, 186, 217, 279》

186 おしろい花とうに忘れた化粧かな (小野みち子)

作者はおしろい花を見て、若かりし頃は念入りにメイクをしていたが、年をとりコロナのマスクのせいもあってメイクをすることもなくなつたなあと自分をふりかえっているのです。かく言う私もオールインワンのクリームをつけて、眉を描くのがせきの山。孫の結婚式の日だけは、白髪を染め買いととのえたメイク一式で化粧を

したものです。作者の想いに共感しました。

菅 勲 選

《13, 16, 25, 37, 53, 134, 147, 172, 204, 243》  
37 海に見る磯の香りの天の川 (山口 雀昭)

若いころ海岸に出て天の川を眺めたのを思い出しました。天の川に磯の香を結びつけたのに驚いています。潮騒も聞こえて来ます。

吉光 好美 選

《80, 107, 164, 190, 198, 215, 222, 250, 257, 271》

佐藤 次江 選

《27, 32, 72, 96, 101, 121, 151, 191, 199, 220》

27 葬よりの帰宅の夫に梨を剥く (神 慶子)

その時の情景がパツと目に浮かびました。親しい方の葬儀の後は、とても落ち込みますよね。特に同級生なら。ご主人の悲しいような寂しいような様子に、そつと寄り添う夫婦の想いが感じられてとても良いと思いました。

上田たかし 選

《22, 29, 32, 48, 55, 78, 98, 111, 174, 195》

111 短日のお好み焼きに足す涙 (足立 町子)

平凡な書き方だけど、内容が濃い。一日の生活の中で生じる喜怒哀楽を淡淡と表現して読者の共感を呼んでいる。特に下五「足す涙」が、短日の生活を描写しながら、生きていることの幸せを伝えている。

赤峰佐代子 選

《80, 99, 151, 190, 214, 220, 251, 257, 260, 263》

竹尾きくみ 選

《5, 25, 69, 100, 143, 151, 181, 190, 214, 263》

69 夏帽のかくす敗者の涙かな (岸本千鶴子)

試合に負けた少年の心を、夏帽でかくして、くやし泣き、思わず私も涙しました。

御手洗豊海 選

《11, 21, 50, 72, 77, 98, 101, 115, 137, 195》

137 明日あるを信じ花の種を採る (川西 達子)

長い人生には山あり谷あり、苦しいこともあります。どんな時でも朝のこない夜はない。明日を信じてそのために自分の実力に合った対応を決意した句だと思えます。

鎌倉真由美 選

《13, 17, 25, 35, 57, 80, 110, 172, 202, 229》

17 若水や喉とおす日の静かなり (菅 登貴子)

喉をとおす水のように、スーと私の中に入ってきた句でした。特別な事が書かれているわけではないけれど、整った生き方が掲句から感じ取られました。

正月の穏やかさ、静かなことの平和、健康で過せる時への感謝、これらが下五の静かなりに要約されているように思えました。今年一年が静かで、穏やかな年でありますように。



この句がいいなと思うところは、小さな針穴と大きな風景の広がる春祭りの対比です。また、今覗く針穴と昔を思い出させる今昔の時間尺からくる対比です。小さな針穴に広がる郷全体で楽しんでる春祭りの風景が目に見えかぶスケールの大きい素晴らしい句と思います。

安部スエノ 選

《72, 91, 135, 151, 190, 223, 231, 246, 251, 267》

夢野はる香 選

《34, 62, 84, 96, 109, 160, 175, 188, 229, 267》

山本 悦子 選

《32, 50, 54, 67, 95, 101, 180, 201, 229, 290》

## 令和六年第1回雑詠句会 選句用作品集

会員73名から219句が寄せられました。これを順不同にシャッフルしています。この中から10句を選び、その中の1句に選評を書いてください。選句の要領は巻末を参照してください。

- 1 花曇り米のとき汁見ているやう
- 2 女正月母と二人でゆっくりす
- 3 櫛のぼったり赤き日本かな
- 4 『消音』で観る余部の雪催
- 5 崖を嘔む太平洋の冬怒濤
- 6 姉の忌の落葉掃いてもまた戻る
- 7 小春日を両手に浴びて蘇える
- 8 夕立が忸怩の壁を解き放つ
- 9 紅白の誰かのあとは除夜の鐘
- 10 どの雛も父いるはずのすまし顔

佐瀬 隆義 選

《20, 34, 50, 54, 60, 77, 94, 96, 108, 174》  
20 銀河の尾きらきら絵本飛び出して (牧野 桂一)

手垢のつかない初々しい句に魅かれます。作者は郷土の昔ばなし等にも造詣のふかい教育者、いかにも作者に似つかわしい一句です。絵本コーナーに行くとき楽しくて若返る。開くと立体にとび出す絵本も。銀河の尾きらきら：イメージが天までとどく。やさしく詩情もゆたか。32、34番の発想、見付けの鮮やかな秀句に唸りました。選句上手な人の評を拝聴してしまつたと思うことも多々。選句は楽しく難かしいねエ。

- 11 寒月を見つめて我はジャズを聞く
- 12 数え日の遺影に煙草二本あり
- 13 消しゴムの屑の行方や除夜の鐘
- 14 元日の笑い声失せ震災地
- 15 冬銀河幾何学模様遊びをり
- 16 冬構えときに頑固な巖もあるかな
- 17 どうしよう高いコートに一目惚れ
- 18 正月を引っ張って来て亡き子の墓
- 19 木枯らしの握りしめたる両拳
- 20 限界の集落の穴風の夢

- 21 大晦日気持新たに終い風呂
- 22 揺れる街垂れた電線虎落笛
- 23 追憶の丸い母の背毛糸編む
- 24 着ぶくれて浮世話が紛れ込む
- 25 鯛焼き半分こ頭は妻に
- 26 熱燗をぐびとおはこの浪花節
- 27 不器用な男の貌です榎櫃の実
- 28 七五三姉には姉の髪飾り
- 29 数え日や宝のように遺影拭く
- 30 除夜の鐘明日を待たずに友逝けり
- 31 元日や地震の記憶のそとにみて
- 32 降りしきる雨を迎えてお茶の花
- 33 鏡餅一日を待たず崩れ落ち
- 34 鳥渡る母の着物を手放せば
- 35 明日へのかすかな不安夜の梅
- 36 薄氷を溶かして左右踏み出せり
- 37 人生を笑顔で煮込む去年今年
- 38 鳩が飛ぶ祈りは永久に初日の出
- 39 よみがえる母の命日クリスマス
- 40 秋風や廃家の庭の瓦礫踏み
- 41 無口なる夫の存在せき一つ
- 42 眠る杜毀さぬように木の実降る
- 43 冬の川ユニボ操る女子社員
- 44 一つだけ残せし耕作の管理機かな
- 45 吐く息の白さが語る寒さかな
- 46 廃校の芒の波や世を写し
- 47 神楽面取ればやさしいパパの顔
- 48 鏡には虚像の我や寒鳥
- 49 戦ひの無き世を願ひ初点前
- 50 名を呼ばれわが名が好きになる小春
- 51 名を呼ばれ妻に戻れり初曆
- 52 春風のバラリとめくる紙の辞書

53 黙れラジオバレンタインとしつこいぞ  
54 散り急ぐ山茶花の白女郎塚  
55 村老いて木枯ばかり纏れゆく  
56 明けやらぬまだ暗き空月冴ゆる  
57 事故死の報八幡様の古狸  
58 能登震災何とかすると受験生  
59 百年を夢見し父の農日記  
60 餅を焼く夫は童顔平らな日  
61 立春や仮寝の日々はいつ終わる  
62 花柄のエプロン新たな雑煮かな  
63 半島のゆうひ集まる寒さかな  
64 ゲルニカの愚か幾たび冬北斗  
65 湯気を立て笑顔引き出すぶり大根  
66 幼年の昭和のつらら探しけり  
67 元朝や蒼きまなれ水の星  
68 バスの子に手を振る母や能登は雪  
69 オホーツク波頭が春の顔になる  
70 うつし世の能登震撼すしめ飾り  
71 重体の地球から出る軽い咳  
72 高原の春みえかくれ三俣山  
73 ウアウアミと猫に春眠じゃまされる  
74 認知症母の微笑雛の前  
75 水仙や見渡す限り海の波  
76 晩学や回転木馬に春は乗る  
77 追羽根や空のコートに走り果て  
78 冬の蝶薄紙のごと羽破れ  
79 初夢というあやふやな舟を漕ぐ  
80 駆ける子の頬赤らめて冬の朝  
81 坑口の脇に冬至が積んである  
82 火酒あおるアプレゲエルと半グレと  
83 神遊び子にある初潮父は知らず  
84 来る年は良き事あれと晦日蕎麦

85 茶柱や指に伝わる福沸かし  
86 点眼のあとには欠片の望の月  
87 カニ食らう娘の手際黙々と  
88 気は若し屠蘇よりワイン傘寿越え  
89 寒星がコツンと僕に生きている  
90 初日の出距離を保って夫婦岩  
91 名月や宮の廁が待っている  
92 新年のハガキに嬉しい添え一言  
93 麦の芽の大地を割って行軍す  
94 軒染めて友に貰いし吊し柿  
95 寒いねと言つてトーストにバター  
96 鼻歌をひとつ加えてかぶら炊く  
97 バス停の寒鴉もうバスは無い  
98 大きくさめ始発電車の動き出し  
99 ぐたびれた柚子を教えるしまい風呂  
100 数え日の為すべきことの焦燥感  
101 能登災禍薄明りなき寒の雨  
102 諍いの仲を取り持つ寒造  
103 たくましき未来を絵馬に花八手  
104 生きること悔い多かりき寒の月  
105 日記買う白紙のままに山眠る  
106 地震の果て夢に出でるは春の景  
107 元旦の空やどこかで赤子泣く  
108 ほたる草大きな声ではいえないわ  
109 こんな夜もひとりの至福葛湯吹く  
110 薄氷を踏む少年の反抗期  
111 深呼吸斜光両手に冬木立  
112 初場所や無傷の力士は少数派  
113 杉山に吸はれゆくごと川霧  
114 山深く迷ひ込んだる初音かな  
115 ガラス皿砕けてまたたく冬銀河  
116 朝刊の三面記事の雑煮かな

117 廃農の何もかもが出て行けり  
118 風切つて土手を走ればつくしんぼ  
119 皺の手で塩梅どうか吊し柿  
120 うんちくの後に雑炊やつと出る  
121 寒牡丹は小袖の中にいる  
122 春の風邪コロナ禍ではと思ひけり  
123 今生の奥へ奥へと木の実落つ  
124 藪柑子あの日写真送ります  
125 ポツポツと菜の花明り両隣  
126 磯遊びし濡れ五年三組は  
127 蠟梅や謡の声に綻びぬ  
128 冬の灯をこぼし削がれる村の明日  
129 凍てる朝お地蔵様に茶を供え  
130 悴むやけふも終電塾教師  
131 日の本の灰汁出しきつて大旦  
132 ねじり花ねじり野にある風を呼ぶ  
133 火照る夜はのつべらぼうに雪女郎  
134 玄関に柵挿して意思表示  
135 木の葉舞う弟手振る曲り角  
136 ころろんらん小春の弾む賽銭箱  
137 絶望も希望も虚妄遠い春  
138 焼き網のサザエ囲んで初日の出  
139 龍雲の眼光のごと初日の出  
140 春寒や地球絡めしWEBの糸  
141 庭先にシャベルきんかんの実に雨  
142 佐保姫の裳裾ぬらさんゆばりして  
143 湯けむりに匂ふ大根地獄蒸し  
144 大寒や神社の手水龍の口  
145 早二月事多しなり腰重し  
146 初孫の小さき雛も11才  
147 種袋切れれば呼吸をはじめけり

148 茶の花の雨を含める白さかな  
 149 一日を静かに戻る冷奴  
 150 椎の実や乳歯一本放り投ぐ  
 151 コーヒー一杯パソコン開く冬のカフェ  
 152 薄氷の記憶の底にある昭和  
 153 除夜の鐘最初の音をはたとときく  
 154 落葉踏む音が聞こえる午前四時  
 155 鳥帰る昭和のマドンナ土井たか子  
 156 砲車砲音枯るる間もなき牛の舌  
 157 風邪などを引く事なきぞ玉子酒  
 158 草氷柱なじんだ指輪誰の手に  
 159 空箱に春の噂が忍び込む  
 160 お年玉今年で最後肩軽し  
 161 冴えわたる三十路の吾の越天楽  
 162 山国の父は静かな巖です  
 163 春寒や診察室の丸き椅子  
 164 独活うどを買いて来て親類が遠くなる  
 165 桁違い暮れ号外の翔平どん  
 166 逢引きは隣の空き家猫の恋  
 167 稲架掛けや空き家バンクで活気づく  
 168 薺粥注げば椀に野原あり  
 169 守られし命聖夜の産声よ  
 170 反骨のかたちに伸びるとろろ汁  
 171 赤きマフラー地下道一気にかけて抜けて  
 172 梅林を出て煩惱が目を覚ます  
 173 憤懣を押しつぶすと落葉踏む  
 174 青空へ己を曝す枯木立  
 175 ほつほつと恋の予感や冬木の芽  
 176 時空を生きたただ花を見ていたり  
 177 左義長の火の高さ子の高さ  
 178 山峡のさびれし町も花は咲く

179 冬萌えや手はポケットに畦道を  
 180 帰り道ふつと淋しくなつて・・・春  
 181 おしゃべりは妹まかせ夜の雪  
 182 梅蕾はどの夢まだ持ち続け  
 183 茜あざみさす百万本の霜柱  
 184 非日常揺れる能登は元旦に  
 185 受験月右往左往の祖母おかし  
 186 煮ごぼうの味加減よし小正月  
 187 諦めも選択肢なるつくづくし  
 188 特大の絵馬を提げて待つ初日  
 189 「ご自由に」ロビーの隅の初暦  
 190 手が震えて字を書くのもままならぬ  
 191 菜の花の咲く向こうにはお嫁さん  
 192 スケジュール暦に頼り去年今年  
 193 初点前部屋の数だけある無音  
 194 紅葉散るはかなき姿見せばやな  
 195 焼芋の熱あつ感を口にする  
 196 善人の貌して黄泉へゆく霜夜  
 197 凧がまちぶせている五番線  
 198 つばめ来るいつも通りという奇跡  
 199 二類五類どうでも良いと鳥帰る

200 故郷は夢はるかなり浮寝鳥  
 201 やわらかな記憶溶かしてゆく初日  
 202 深々と夫の被りし冬帽子  
 203 松明のこぼる階きざはし修正鬼云  
 204 もぐら打つ声も揃いて学童園  
 205 声かけにだまり返しは咳一つ  
 206 掛取りをのぞき見する娘ぢれ髪  
 207 紅梅が能登によりそう深空かな  
 208 冬うらら感會うれし美術館  
 209 足形に規則正しくマスクマスクマスク  
 210 夢ひとつポケットに詰め春を待つ  
 211 能登の海大地引き揚げ魂落とす  
 212 境内に忘れ物なり雪うさぎ  
 213 凍る滝刻の止まりし素顔なり  
 214 水底に魚影水面に散る桜  
 215 来し方の足し算引き算臥龍梅  
 216 鱒しやぶをすくう食卓はしゃぐ声  
 217 日向ぼこ「ボー」と生きてて「何故悪い  
 218 スマホにて早目の春を友くれし  
 219 やってみることを選べと卒業式

(以上)

## 第2回雑詠句会 Ⅱ 作品募集 Ⅱ

※大分県現代俳句協会では、内部の勉強会として年三回の通信句会を開催しています。今回募集するのはその中の一つで、会員ならず誰でも応募できます。(投句は会員だけです。選句は会員外もOKです) ※一人三句。当協会には未発表のもので、なるべく当季(今ごろの季節)のものを、ご用意ください。 ※作品は自動的に「年間一句賞」の対象になります。(年間一句賞は総会で表彰します) ※締切は九月十三日(金)当日消印有効。郵便事情が悪いのでなるべく早めの投句にご協力ください。 ※送り先は事務局 (〒879-7151大分県豊後大野市三重町西泉436足立攝方 FAX 0974-22-3749) ※同封のFAX用紙でお近くの「コンビニ」からお送りくださると便利です。送り方は「コンビニ」におたずね ください。その他、郵送やメールなど、読めさえすれば形式にはこだわりません。

## 219句から10句の選句をお願いします

◆右の第1回雑詠句会作品、219句の中から10句を「選句」し、その中の1句に二百字程度の「選評」を書いてください。選評は短くても、多少長くても、書かなくてもかまいません。

◆選句・選評には当協会の会員以外の方でも参加できます。当協会は俳句の多様性を尊重しています。なるべく多くのご意見をうかがうことが、私たちにとつての勉強であり同時に刺激です。ぜひ、ご参加ください。

◆選句は番号の若い順に並べて書いてください。前後して書くこと事務局が間違ふ可能性が大きくなります。ただし、用紙を汚してまで書き直す必要はありません。逆効果になります。

◆作品番号だけでなく、間違いを防ぐために上五もお書きください。事務局を七年やっていいますが、作品番号と上五が全員全句に渡って一致したことは一度もありません。

◆当たり前のことですがご自分の名前を書くこともお忘れなく。二、三回に一度くらいの確率で名前の記入のない人がいます。それで投句用紙の名前の位置を変えました。

◆選句・選評の締切は9月13日(金)当日消印有効。右ページ「囲み記事」の「第2回雑詠句会」の投句締切日と同じです。

◆今回に限らず事務局は、できるだけ会員のみなさんの融通を利かせます。締切日を過ぎて「しまった」と思ったときは、あきらめずに一度ご相談ください。編集の都合で間に合わないときもあります。数週間の猶予があるときも

あります。(これは事前に分かりません)

◆同封の選句用紙を使うと、どのコンビニのファックスでもほとんど50円で送れます。使用方が分からないときはコンビニにおたずねください。自宅のファックスでもOKですが、筋が入って読めなかったり、ローラーの吸い込みが悪く二枚に及ぶことが多発しています。

◆ファックスで送る場合の一般的注意として、エンピツ等の字の薄いもの、カスレのあるものはお避けください。正確に受信出来ません。

◆選評などで誤字脱字や読みにくい文字がたくさんあります。事務局では簡単に無効にせず何とか読み解こうとするため、五倍も十倍も時間がかかることとなります。「中学生でも判読できる原稿」にご協力ください。

### 【新会員のみなさんへ】

◇当協会には第一回雑詠句会(三句出し)、第二回雑詠句会(三句出し)、自薦作品(四句出し)という、年三回の内部の通信句会(勉強会)があります。名称は違いますが、みんな同じものです。いずれも協会の日常活動の一環ですから、投句料は発生しません。

◇協会ではこの、年三回の勉強会に提出された全作品の中から、特別選者による「年間一句賞」が授与されます。特別選者は総会で決められ、現在は三人です。各会員が投句した全句が、自動的に「年間一句賞」の対象になります。

◇当協会は会員相互の「教えあい学び合う気風」

を重視しています。俳句を作りそれを仲間に見てもらふこと、また仲間の俳句を読み、その優劣を自分なりに判断することは、俳句活動の基本です。内部の勉強会に参加するかどうかは会員の自由ですが、参加すれば俳句は確実に上達します。作品も、選句も、選評も、「人の目に晒すこと」が上達の近道です。

◇自分の句に行き詰まったとき、解釈の難しい作品に出合ったときなどは、遠慮なく事務局にご相談ください。事務局は会員と協会を繋ぐ「窓口」の役割を果たしています。



# 大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: [info@gendaihaiku.net](mailto:info@gendaihaiku.net)